

條 條 後

第一章 船舶伝載経過の概要と其の意義

上に現れたる特性

第一節 船舶伝載の概観 本質

船舶伝載

の意義

船舶伝載と云ふ言葉が初めに使はれたのは

昭和十七年の九月に参謀本部からの命令で

ラハル方面に<sup>船舶</sup>幕僚が派遣せられた時に「……」

現地船舶部隊の船舶伝載を指導すべし」と

云ふ言葉があった 従来船舶輸送 <sup>と上陸部隊が</sup> といふ

輸送のみを考へて来たが、輸送だけではないと心得の

戦間、浦松寺の左範圍の任務が充ちせられて

来たぬと考へられた

従来船舶輸送司令部とあるのを <sup>船舶司令部</sup>と云ふ

このためであらうが、船舶部隊 <sup>に陸軍運輸部が取り之を</sup> 本来の任務

海上船舶輸送のありて <sup>根據として</sup>

内地は勿論外地に隸下の各部隊を出して輸送の任務を

遂行し、その支那事変より今次戦争の進展に伴つて

其の部隊の拡充も目まぐるしく其の活動の地域は全東部の <sup>の如く</sup> 海峡に亘る事になり其の要港の重要は別紙附表第一乃至第四



~~船舶作戦~~  
~~の要領~~

船舶作戦の形態は敵の勢力と我が作戦

要領手による異なった型を示しまたかゝる根本

原因は何かとも敵の航空勢力の強弱によ

左右されたものがある

支那事変中は敵の航空勢力は強となく潜水艦の

危険もなかつたので輸送と云うは大型船団で強行

輸送が行はれた。わ型自航の使用は地形上

已むを得ず行はれたもので揚子江や珠江の遡江

作戦もまた輸送行せられた

今迄戦争でも當初のまだ制空権が味方の手に

ある時は「シゴウ」「コタパル」「リキエン」「バンタム」

等の上陸作戦は大型船団の強行によるものであった

多少の船舶損耗はあつたにしても比喩上度々

成功した

此の大型船舶強行式が無理ではなかりかと思ふ

のねらふものは「カタルカナル島」の強行輸送であつた

最優速船 毎子丸 佐渡丸等のS級

相模丸

などの當然日本としては最精鋭の船舶が昭和

十五年

十七年の十月に五隻を以てカ島に突入した此の

時は全部到着したが損害を多めて次没した

もの二隻であった。泡盛<sup>日中</sup>土月 次級船用とも

ふたつ生き残りの優速船十三隻を以てカ島

に突入したが既に途中で船破や沈没したた

かいて損害を減少し再び船破し得たものは二隻又

で結局

次没土月八五%の損害であった

かくして昭和十八年二月初頭の「カ島」戦況に於ては

船用七隻は船材百載材の猛攻により僅かに

二十数合を以て全滅の悲運に遭った

↑この運搬の十分の一にも足らぬ

海洋に於て敵空母の力には大型船団は白紙

の上を匍匐し上から撃つ様なものによ

かくして優勢な敵空母の前には大型船団強行

1024

1053

輸送は一人の機多と化し去ったのであるよ

昭和十七年未頃からかくはならじとの観念の

下に船舶作戦の型態の変更も餘儀なく

せらまよに到つた 即ち小型船舶によ

隠密、分散輸送の型式である 此の着想の

下に大義で夜間を利用しはらぐと輸送し

或は潜水輸送の必要をせじて來た併し

此等は残念ながら輸送(量)の少減と云ふこと

難事があった

併し大型船と雖も敵艦の制射を受けた

と當時は次の三つの難事を暴露し去つた

一 是は一月は十五日である、これは一月の中十五日

内は月明のため大型船の行動を許さな

一 是は一日二十四時間は僅かに四乃至五時間となつた

即ち日没前三時間は目的地に近づけなく

日没前三時間は既に目的地を離れなければならなかつた

1023

1054

三は一万噸の大型船も僅かに一千噸に満たぬ  
 所と云うの能力が、是れは目的地の碇  
 泊時間、夜間の回着<sup>カモ</sup>六時間であるに、此の内に  
 揚陸し得る員数は、如何に一千噸を積んごぬとも  
 一千噸に満たぬのである。

大型船の運送の本拠の悲運は、<sup>以上三つの難</sup>  
 にも<sup>山崎ギツノアツ</sup>存<sup>シ</sup>まぬたのである。

小型船の隠密、分散輸送はその必要性を  
 痛感したつとも、依然として前航空機と新航  
 機との高<sup>敵</sup>速<sup>敵</sup>並<sup>敵</sup>型<sup>敵</sup>のぬく打撃を受け、た  
 特トダンピール海峡の波浪は、大英の運輸  
 に多大の困難を伴ふ。

小型船の輸送の狙ひ所は、隠密、分散、高<sup>敵</sup>速<sup>敵</sup>  
 の三要素に、通かして研究された、隠密式のぬくは

潜航艇運送艇の使用であり、夜間の活用である。夜特軍の偽造が如何に大であったか。南方太平洋方面では、偉大なるものがあった。これと共に、皎々たる満月は如何に恨み多かりしことよ、であったか。

分散式は大突効艇等の小舟の使用であった。高連式のためには伊号高連艇とPB艇とであった。

潜航艇運送艇は、トイテシヨウ入艇運上艇又、<sup>沖繩列島の</sup>徳島島に運送に一艇又、<sup>徳島島</sup>の島に運送は、教度供した。

伊号高連艇は、殆ど役に立たなかった。

かくの如く、船舶作戦の型式は、大型船舶から

小型船舶へと移行して行ったが、其の困難性は益々加った。

此の間に在りて、忘れ得ぬものは、海上と云うや

押帆船、漁船の運用であった。<sup>伊号高連艇と潜航艇</sup>

向か、鉄巻と締め、た漁船船員の出来心は、<sup>船の</sup>誤の下と、思ひがあった。

船の誤の下と、思ひがあった。

昭和十七年 初秋の侯より

敵の飛石作戦は遂に  
成功せられた

作戦は攻めより守勢に移り、敵軍は

（レイテも天王山として）

以島上陸に及んだ。此の際日本は侵入し得る限りの

陸海空の精銳を注いだ。遺憾なく

成功するに到らなかった。遂に南方との海上

輸送を遮断され、南方資源の日本への搬入は

断絶せらるゝに到った。この時わが国も其の

のは油の移送に及ぶ。この戦中は油がなくては

一 戦後 其の技術

始まり油がなくては敵はたてがた

大型船は油焚のものを石炭焚に改造せられ

油焚の大型船 一万噸の熊野丸は、あたら

（昭和二十年）

進水のまゝ五月迄から戦後後述のなかりおた

（通れ走せられ）

の頃やとABC船の一を運送の向題が起りし

五月十五日、海運總監部が設置せられ

ここに ~~海軍~~ 船船 一を運送の向題が

國家

解決して誕生するに到った

此の比に於ける船舶輸送の取柄の様は

實に敵の機雷投下であった、あちらもこちらも二す  
動は

機雷にかかつて損傷を受ける船が続出す、

機雷の掃討には目途を要する、待つは何時かよ

かゆからない、動けば沈没と云ふので、漸くゆめゆめ

船舶が釘着けとなるよ

因り、段々其地まで航路は不気味な、魔の海

と化した

昭和二十年の初夏の頃、朝鮮からの放流輸送と

云ふことが記録された、海流を利用する輸送であるが、

その結果は朝鮮に動かれた  
(朝鮮方面より特別輸送の略)

船舶輸送の最後の花は特攻船舶輸送で

朝鮮から内地へ本土決戦の為に古物、物資、

吸収であった、その結果は正に見よ、いまもかあつて

多数の降参を目にしつゝ、一〇八%の結果を

得た

その紋目もまた、子母爆弾、以て軽の参戦となり

悲しむべき、終戦の戦竹付が打たれたのであるよ